

<僕は困難に直面したとき「今、自分にできることは何か」と自問します>

これは、日米の野球シーンで大活躍された松井秀喜氏の言葉です。

松井氏と言えば、1992年、夏の甲子園2回戦での「5打席連続敬遠」を思い出します。1年生の時からチームの4番として活躍し、3年生のこの時には甲子園での大活躍が期待されていましたが、松井選手にとっての甲子園はこの試合の敗戦で幕を閉じました。相手チーム・監督は、試合途中から大きな批判にさらされ、球場内にメガホンやごみが投げ入れられ、試合が中断する騒ぎにまでなりました。私自身も試合中継を見ながら、正々堂々と勝負すればいいのに、と思っていました。しかし、松井選手は、試合後インタビューで「歩かすのも作戦。自分がどうこう言えない。」と語るだけにとどめています。



(勝ったチームは、試合後の宿舎にまで嫌がらせが及び、次の試合には警備員や警察官まで動員され、選手は精神的なダメージから力を出せず、0-8と大敗しています。)

もう一つ、松井氏の人物像を表すエピソードを紹介します。中学2年生時の家族との夕食の際、何気なく友人の悪口を言ったところ、父が箸をおいて「他人の悪口を言うような醜いことはするな。ここで二度とそんなことはしない、と約束しなさい。」と注意されたそうです。「父との約束ですから、あれ以来他人の悪口を言ったことはありません。」

素晴らしい活躍と人柄に注目が集まる松井氏ですが、プロ6年目の左膝の故障、それに伴う右膝への影響と常に戦っていました。いわば常に困難に直面していたといえます。そんな松井氏の言葉、「今、自分にできることは何か」と自問します。」は、非常に深い言葉だと感じます。以前から紹介しPTA文集にも書いた五郎丸氏の「今を変えろ」にも共通するように思います。



卒業式を迎える卒業生、そして進級する1・2年生の皆さん、これからもたくさんの困難や壁にぶつかると思います。そこで立ち止まるのではなく、できることは何かを考え、一歩でも前に進み、今を変えていきたいですね。

<有終の美>

年度末を迎え、1年間のまとめをし、「有終の美を飾ろう」と言われることがあると思います。一般的な意味は「最後までやりとげ、立派な成果をあげること」ですが、この言葉の由来は、中国の『詩経』にある「靡不有初、鮮克有終」だそうです。書き下し文では「初めあらざるなし、克(よ)く終わること鮮(すくな)し」、現代語訳すると「およそ初めは良いが最後まで全うする者は少ない」となるそうです。成果にばかり気を取られず、それぞれの学年での学習内容や出来事をしっかり振り返り、より良い生活を続けてほしいと思います。とはいえ、中学校生活の有終の美は、自分の希望する進路を実現させることです。すでに合格が出ている人、まだ入試を控えている人、「有終の美を飾る」ことで、その先にあるさらに大きな夢や目標に向かって歩みを続けましょう。

(松井氏エピソード、言葉の由来参考：ウィキペディア)

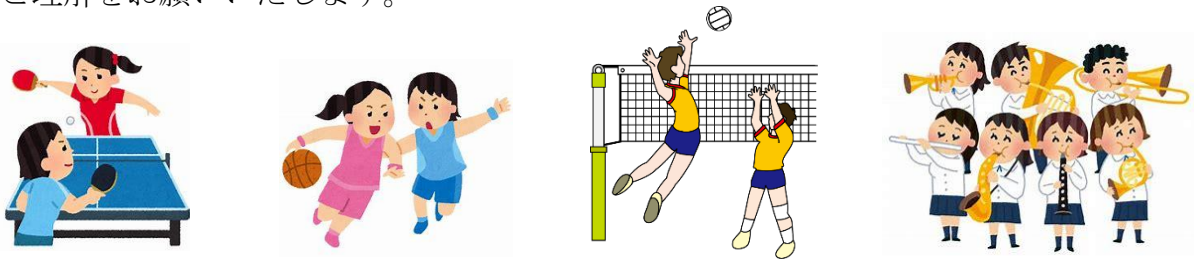
＜緊急事態宣言解除に伴う部活動について＞

外出自粛や感染症対策の徹底が功を奏し、3月1日に緊急事態宣言が解除されました。しかし、完全に終息したわけではなく、ワクチン接種についてもまだ先のことになりそうで、気を緩めると再拡大の可能性はぬぐえません。

中学校の部活動については、次のように対応するよう但馬地区で申し合わせています。

- 3月8日～3月31日まで…原則但馬内での活動（大会・練習試合）とする。合宿は不可。ただし、上位大会につながる県大会等は別途協議する。
- 4月以降…原則県内での活動（大会・練習試合）とする。合宿は不可。

県立学校（高等学校）や但馬地区以外の中学校の対応と異なるかもしれませんが、なにとぞご理解をお願いいたします。



県民の皆様へのお願い（家庭、施設等へのウイルス持込み防止） 兵庫県 HP より

年度末、年度初めは、卒業旅行、歓送迎会など人の移動や飲食の機会が多い時期です。感染の再拡大を防止するため、県民の皆様、特に若い方々には、ご自身の健康や行動に注意していただき、家庭や施設等にウイルスを持ち込まないよう、引き続き、次の取組にご理解、ご協力をお願いします。

- 日中も含めた不要不急の外出の自粛をお願いします。
- 不要不急の都道府県間の移動や、緊急事態宣言対象地域をはじめリスクのある場所への出入りを自粛してください。
- 卒業旅行、謝恩会、歓送迎会、花見による宴会などを控えるようお願いします。
- 会食は、同居家族を除き、1グループ4人以内とし、長時間の飲食は控え、会話の際は、扇子やマスク等により、飛沫を防止してください。
- 毎日の検温、手洗い、マスクの着用など健康管理を徹底し、症状のある場合は、外出を控えるとともに、すぐにかかりつけ医などに電話で相談してください。
- 在宅勤務（テレワーク）やテレビ会議などに一層取り組んでください。

皆様一人ひとりが「うつらない・うつさない」との強い思いで取り組むことが大切です。医療・福祉従事者はじめ、県民の健康や暮らしを支えている方々などには、心より感謝申し上げます。ともにこの難局を乗り越えましょう。

令和3年3月4日

兵庫県知事 井戸 敏三